新規的な派生形容詞に見る言語の使用基盤
Basis of language use in novel derivative adjectives

西内 沙恵
Sae Nishiuchi

北海道教育大学
Hokkaido University of Education
nishiuchi.sae@a.hokkyodai.ac.jp

概要

本研究では「キャパい」など 8 語の新規的な派生形容詞を題材に，形容詞の言語使用を可能にする文法知識の構造を，使用基盤モデルの枠組みから探究する．題材の語に対する既知の程度及び一項述語文・二重主語文・ソウダ文の容認性評定を，大学生を対象に調べた．調査の結果，既知語では二重主語文に，未知語，また既知語であっても感情形容詞に判別される語では一項述語文に容認性が高く評定されたことから，一項述語の文型からスキーマ拡張が生起していることを分析した．

キーワード：新規語，派生形容詞，使用基盤モデル

1. 背景と目的

本研究の目的は「キャパい」や「ラグい」といった新規的な派生形容詞を題材に，形容詞の言語使用を可能にする文法知識の構造について探究することである．形容詞の基本的な用法は一項述語だとされる（川端, 1976；川端, 1983a；川端, 1983b；八亀, 2008）が，ほかの用法とどのような関係をなしているのかは明らかにされていない．「キャパい」，「ラグい」はそれぞれ「キャパシティー」〈容量〉，「ラグ」〈時間的なずれがあること〉という名詞の語頭 2 拍に形容詞の活用接尾辞「い」が結合することで形容詞に派生した語だと考えられる．語義を山括弧に示している．閉じたクラスである形容詞（上原, 2002）の新規語を題材とすることで，文法的な知識が導出される過程の観察と記述を試みる．

2. 先行研究

認知言語学では生得的・自律的な文法が仮定されず，語彙と同様に記号ユニットとしての文法が扱われる．使用基盤モデルでは言語共同体において使用から規則が創出されることが想定されている（Langacker, 2000）．新しい事例の使用には，既存の規則に当てはまる場合と，既存の規則に合致せず逸脱する場合とがあるとされる．既存の規則に合致しない事例は頻繁に出現することで，既存の事例から抽出されるスキーマからの拡張事例として取り込まれ，定着が進むという．スキーマとは事例間の共通性を指す．逸脱した事例の出現によって拡張が起こることで，上位のスキーマが既存のスキーマと共存し，適宜必要な次元のスキーマが活性化されるという．本研究では新規的な派生形容詞を対象とした調査から，複層的な内部構造を成す形容詞の文法的な知識の構造を明らかにすることを目指す．

3. 調査

3.1 調査の対象

新規的な派生形容詞には名詞由来の語が多く見られるが，多様な新規語を分析の対象とするために，名詞以外の品詞から派生を果たした語も含めた 8 語を調査の対象とした（表 1）．名詞から派生したと考えられる語として，「キャパい」，「ラグい」，「レモい」，「クズい」を選出した．それぞれ英語からの借用名詞「キャパシティー」〈容量〉，「ラグ」〈時間的なずれがあること〉，「レモン」〈長楕円形で熟すと淡黄色になる，酸味のある果肉を持つ果実．その果実をつける木〉，また日本語名詞「クズ」〈切り離され無用なもの．また役に立たない人物〉から成ると考えられ，語頭から 2 拍を語幹に「い」が結合し形成されている．名詞以外の品詞から派生した語として，日本語オノマトペ副詞「バブバブ」から派生した「バブい」，英語の借用接辞から派生した「メタい」，英語形容詞 *emotional* から派生した「エモい」，動詞 *chill out* から派生した「チルい」を選出した．

表 1　調査対象の語

対象語	派生元の語	派生元の語の品詞
キャパい	キャパシティー	英語由来の借用名詞
ラグい	ラグ	英語由来の借用名詞
レモい	レモン	英語由来の借用名詞
クズい	クズ	日本語名詞
バブい	バブバブ	日本語副詞
メタい	メタ	英語由来の借用接辞
エモい	emotional	英語形容詞
チルい	chill out	英語動詞

なおX（旧 Twitter）の検索から連用形「[形容詞-語幹]くなる」，過去形，仮定形などの活用形に不足が見られることから，厳密には形容詞認定が待たれる語（北原, 2010）である．この点において本研究で観察しようとする用法定着の過程が観察できる可能性がある．

3.2 調査の方法

調査では対象とする語の新規性の度合いと，一項述語・二重主語文・ソウダ文に対する容認性評定を調べ，形容詞の使用基盤の複層的な内部構造を検討する．二重主語構文は「X は Y が Z」という文において，「X は」がガ格名詞句であるものと定義される．なお「X」と「Y」のガ格がハ以外の係助詞，副助詞に置き換えられるものも含まれる．尾上（2004）は事態に対する認識のし方に応じて，一つの文に二つの主語を取る現象を第一種二重主語文と第二種二重主語文に分類している．第一種二重主語文は「私は故郷がなつかしい」のように事態認識の中核項目と事態認識における着目点とが一致しない文だとしている．事態認識の基盤としての着目点主語が特別に求められ，それとは別の中核項目として第二主語が生起しているという．第二種二重主語文は「X は Y が Z」において X の一部ないし一面である Y のあり方を語ることで X 自身のあり方を語る意味構造を持つ文だとされる．第二種二重主語文において X と Y の間には「X の Y」といえるような関係が成り立ち，全体と部分の関係を典型に，個体と所有物の関係など幅広く表される．表 2 のように X と「Y が Z」が主述関係をなす文を典型に，X と Z が直接的に主述関係を結び，Z の焦点として Y が意識される文などに広がりを見せる．本研究で刺激文として提示する二重主語文に対しては第一種二重主語文もしくは第二種二重主語文による解釈における容認性を評定していただくこととなる．

表 2　第二種二重主語構文の分類
（尾上・木村・西村, 1998 を参考に作成）

X-Z が主述関係	X･Y は全体・部分	X-YZ が主述関係	「X は Y」で通じる	
○	△	○	×	この壺は色が青い.
△	○	○	×	あの子は目がかわいい.
×	○	○	×	象は鼻が長い.
×	○	○	○	相撲は立会いがおもしろい.
×	△	△	○	辞書は新しいのが良い.

また形容詞は文法的な振る舞いの異なりから属性形容詞と感情形容詞のタイプに分類される．形容詞タイプを区分する基準に，西尾（1972）による属性形容詞に当てはまらず感情, 感覚形容詞に当てはまる項目 IV「あなた／あの人は〜そうだ. 感情（覚）の表れた様子」（西尾, 1972, pp.22-23）を援用する．なお「[形容詞-語幹]そうだ」は，心の様子を表す内部ソウダだけでなく，〈[形容詞] ように見える〉という外側の様子を表す外部ソウダの解釈も可能である．村上（2017）の手法に則り，内部ソウダであることを「([形容詞] と感じているように見える)」のように，文の解釈を刺激文に括弧書きで示し，「感じている」が入った解釈の容認性が高い場合に感情形容詞に判別する．

調査の手続きは次の通りである．2024 年 4 月に H 大学に所属する学生 30 名を対象に，個人のパソコンで Google form にアクセスし，分析対象の 8 語を知っているか，意味がわかると思うかをそれぞれ 7 段階で回答していただいた．また派生元の名詞の知識が活用されているかを確認するために，どのような意味だと思うか，自由記述で回答を求めた．その後 Google form から外部リンクにより PCIbex farm にアクセスし，図 1 のような画面から最大値 6 から最小値 0 で容認性を評定していただいた．刺激文は形容詞 8 語×名詞句 3 種×第一主語のみの一項述語文と第二主語も加えた二重主語

図 1　調査画面の一部

このゲームは解説がメタい。

文が日本語として不自然だと感じる場合は「0」を，日本語として自然だと感じる場合は「6」を，中間の場合は引っかかりの程度に応じて「1」〜「5」を選択してください。

日本語として不自然だ　0　1　2　3　4　5　6　日本語として自然だ

数字をクリックしてください。

文の 2 条件を適用した 48 文（表 3）（1ab）及び形容詞 8 語×ソウダ文解釈の 2 条件を適用した 16 文（1cd）をあわせた 64 文である．

(1) a. この仕事はキャパい．
b. この仕事は覚えることがキャパい．
c. 太郎はキャパそうだ．（太郎がキャパいように見える．）
d. 太郎はキャパそうだ．（太郎がキャパいと感じているように見える．）

参加者は 2 グループに分けられ，（2）のような 3 文の練習の後，刺激文がラテン方格法で分配され，1 回の回答に 32 文が割り当てられている．容認性評定の押し間違いをなくすために，回答ごとにスペースキーを押すことで次の文に進む手順を取り，調査画面が連続しない形で文を提示した．容認性評定平均を括弧で示す．

(2) a. この敵は雑魚い．（5.10）
b. この香水はギャルい．（2.53）
c. 先生は英語がペラい．（2.30）

3.3 調査の結果

調査の結果，対象の語が既知かを確認するアンケートは 30 名分が，容認性評定はラテン法格で分配されたグループごとに 11 名分と 19 名分が得られた．既知の程度と一項述語文・二重主語文に対する 7 段階の評定結果を図 2 のようにまとめる．ソウダ文解釈に対する容認性評定は表 4 に示す．

表 3　刺激文の組み合わせ

対象語	第一主語	第二主語
キャパい	この仕事	覚えること
	この人	作業量
	このゲーム	データ
ラグい	このゲーム	通信
	この人	話
	この仕事	進行
レモい	このジュース	風味
	このお酒	果汁
	この料理	香り
クズい	この人	性格
	このゲーム	ストーリー
	この仕事	やり方
バブい	この人	顔
	この写真	色味
	この人	髪型
メタい	このゲーム	解説
	この人	発言
	この仕事	視点
エモい	この写真	色味
	このゲーム	ストーリー
	この人	話
チルい	このジュース	風味
	このゲーム	ストーリー
	この写真	雰囲気

図 2　既知の程度と容認性評定の平均値

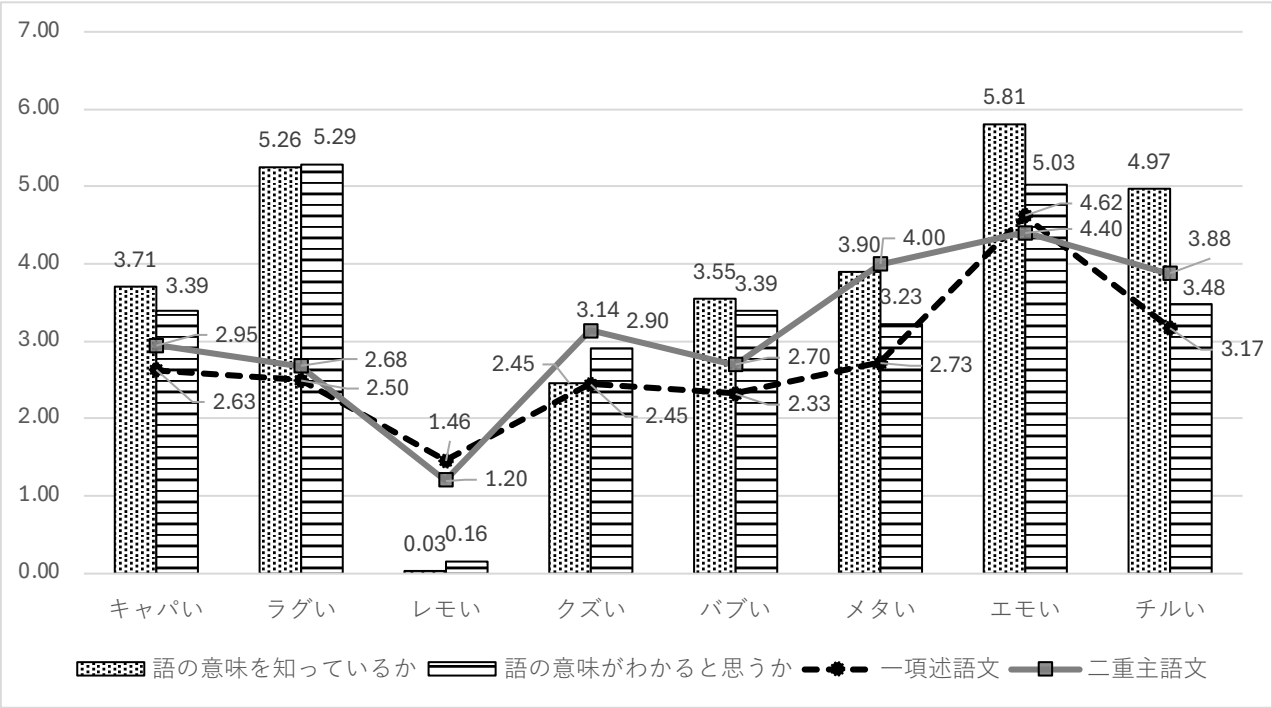

表4　ソウダ文解釈に対する容認性評定の平均値

対象語	外部ソウダ解釈		内部ソウダ解釈	
	M	*SD*	*M*	*SD*
キャパい	1.89	2.34	2.55	2.35
ラグい	1.09	1.93	1.21	1.76
レモい	0.09	0.29	0.11	0.31
クズい	4.37	2.16	2.27	2.56
バブい	1.82	2.17	2.58	2.11
メタい	1.16	1.66	1.27	1.42
エモい	1.27	1.60	2.32	2.13
チルい	2.79	1.99	1.64	2.01

「クズい」と「チルい」で外部ソウダ解釈が内部ソウダ解釈より 1 ポイント以上高く評定された.「クズい」と「チルい」以外では内部ソウダ解釈が外部ソウダ解釈より高く評定されたが, 1 ポイント以上差があったのは「エモい」のみであった.

4.　分析

本節では調査した派生形容詞の新規性の度合いと，一項述語文と二重主語文に対する容認性評定の関係から，形容詞の使用基盤となるスキーマ拡張について検討する. 調査の結果から, 未知語の形容詞に対しては二重主語文より一項述語の容認性が高く評定された.「レモい」の語義の自由記述では 30 名中 17 名が「レモン」に関連付ける記述を行っていた一方,「エモい」と関連付ける記述も 2 名分あったほか,「恥ずかしさを含んだ感情のことを指すと思う.」という感情に結び付ける回答が得られた．容認性評定から未知語においては一項述語の文法的な知識が活性化していることが見て取れる．また既知語であっても「エモい」のように内部ソウダ解釈が外部ソウダ解釈より高く評定され感情形容詞に判別される語において，一項述語文が二重主語文より容認性が高く評定された可能性がある．使用基盤モデルを観点に取ると，2 拍の語幹に「い」が結合する形容詞の新規事例に対して既存の規則を適合するにあたり，一項述語文が二重主語文に比べて適合されやすく，一項述語文から二重主語文へとスキーマ拡張が起こると考えられる．また二重主語文へのスキーマ拡張の起こりやすさには形容詞タイプが関係している可能性が「エモい」から見て取れた.

以上より，形容詞のプロトタイプ的な用法が一項述語であるという記述研究を裏付ける結果が得られた. また新規語の定着にともない，二重主語文の用法が獲得される過程が観察された.

5.　考察

本研究では「キャパい」などの新規的な派生形容詞を題材に, 形容詞の文法知識の構造について, 使用基盤モデルの枠組みから分析した．対象の語に対する既知の程度，一項述語文・二重主語文・ソウダ文の容認性について大学生 30 名から評定を得た．既知語では二重主語文で, 未知語, また既知語であっても感情形容詞に判別される語では一項述語文で容認性が高く評定された結果から，一項述語文からスキーマ拡張が起きていることを分析した．本研究で実施した調査では調査協力者の新規語に対する知識が想定より豊富であり，既知の程度が高かった．既知の程度と一項述語文に対する容認性の関係を確認するために, 今後, 存在しない語を用いた調査を実施したい．またガ格以外の格助詞を題材にデータを拡充することも今後の課題である.

文献

川端 善明 (1976). 用言　宮地 裕・北原 保雄・渡辺 実・ 山口 佳紀・川端 善明・市川 孝・ 尾崎 知光・古田 東朔・奥津 敬一郎 (著)　岩波講座: 日本語6 文法I (pp. 169-217). 岩波書店

川端 善明 (1983a). 日本語文法提要 2 : 文の基本構造　日本語学, 2(2), 103-107.

川端 善明 (1983b). 日本語文法提要 3 : 文の構造と種類ー形容詞文ー　日本語学, 2(5), 128-134.

北原 保雄 (2010). 日本語の形容詞　大修館書店.

Langacker, R. (2000). A dynamic usage-based model. In M. Barlow & S. Kemmer (Eds.), Usage-based models of language (pp.1-63). CSLI Publications.

村上 佳恵 (2017). 感情形容詞の用法 : 現代日本後における使用実態　笠間書院

西尾 寅弥 (1972). 国立国語研究所報告 44 形容詞の意味・用法の記述的研究　秀英出版

尾上 圭介 (2004). 主語と述語をめぐる文法」尾上 圭介 (編) 朝倉日本語講座 6　文法 II (新装版) (pp.1-57). 朝倉書店.

尾上 圭介・木村 英樹・西村 義樹 (1998). 二重主語とその周辺　言語, 11, 90-108.

上原 聡 (2002). 日本語における語彙カテゴリー化について : 形容詞と形容動詞の差について　大堀 寿夫 (編)　認知言語学 II : カテゴリー化 (pp.81-103).　東京大学出版会

八亀 裕美 (2008). 日本語形容詞の記述的研究 : 類型論的視点から　明治書院